

東洋學報

第八十七卷第四号 平成十八年三月

論説

北魏漢人官僚とその埋葬地選択

室山 留美子

はじめに

故郷への「帰葬」は、古代中国の上層階級にとって重大な関心事であった。「帰葬」とは、礼の問題であり（『礼記』檀弓上）、上層階層は礼の体現者として自らを位置づけていたからである。ところでその意味では、「帰葬」は当時の社会身分秩序と深く関わり、ひいては貴族制へと波及する問題としてとらえることができる。当時の郷党の社会秩序は礼制によって支えられていたという見解が存在し、なかでも喪礼は突出して尊重され、また壮大な墓葬は日常的にその姿を目にすることによって、郷党の民衆に威圧を感じさせ、ひいてはそれが社会の現実的な秩序を強固にしていく役割の一端を担っていたと予想されるからである。

しかし一方では、都に墓地を営む現象が屢々見られる。それは陪葬であることもあるが、多くは都に居住する者

の墓地である。しかもそれは個人ではなく、一族の墓であることは、その一族の郷里からの離脱と都への永住、ひいては在地性の放棄と中央官僚化の傾向を強く示唆している。先に述べた帰葬の場合も、多くは官僚として都に居住してのち郷里に帰葬されるのであるが、それらと都への墓地定着とは決定的な差がある。そして、そこには官僚の在地性と中央集中化、及び君臣關係に關係する問題がひそんでいると見られる。

以上のように認識すると、特に注目されるのは北魏ということになる。なぜならこの王朝は異民族がその政權を握り、主要な支配地域を有力漢人層が存在する山東・河南へと次第に拡大させていき、徙民政策、首都の移転、胡漢融合等という特殊な要素を内包する。それ故に、この時代を性格づける如上の葬地の問題に關しても特異な事情が生じることが予測され、そこからこの時代の歴史的性質を認識する手がかりを得られる可能性がある。

しかし、これまで北魏史研究においては、この問題を自覺的かつ集中的に取り上げた研究は多くはない。例えば森三樹三郎氏は「南朝の貴族は、江南土着のものを別とすれば、大部分は永嘉の乱によつて南遷して來たものであつた。したがつて経済的に弱体であつたのは当然であり（中略）、これに反して北朝の貴族は、墳墓の地にそのまま止まつた者が多かつたのであるから、経済的にも社会的にも有力なものが多く、なかには軍隊組織を持つものさえあつた」⁽¹⁾と述べられており、漢人とその葬地との關係を漠然と捉えるのみである。また川本芳昭氏は「孝文帝改革以前の漢人（新人）には結婚、承継、墳墓の位置等において強い規制があつた」と簡単に触れられたことがあるが、それ以上深く考察されていない。⁽²⁾宿白氏はかつて平城と洛陽における北魏墓の地点をそれぞれ明確にしたが、その解釈は主として元氏宗室墓にむけられている。⁽³⁾

そこで本稿では、近年來までの考古学的成果を踏まえつつ、⁽⁴⁾ 埋葬地選択とその所在の実態を検討し、北魏史における政治体制と漢人官僚層との関係、あるいは漢人有力官僚層と郷里社会との関係などについて、新たな視点を提供したいと思う。

一 埋葬地に対する意識

まずはじめに、北魏においても葬地選択が、一種の政治的・社会的問題であることをしめすとおもわれる事例を検討してみよう。『魏書』卷八三外戚下胡國珍伝には、時の皇太后胡氏（靈太后）の父、胡國珍の埋葬地について、以下のような記事がある。

始め國珍祖父に就き西のかた舊郷に葬られんと欲す。後に前世の諸胡多く洛に在りて葬らるるに縁り、洛に終わるの心有り。崔光嘗て太后の前に對いて國珍に問うらく、公萬年の後此に在りて安厝されんと爲すか、長安に歸らんかと爲すか、と。國珍言うらく當に葬を天子の山陵に陪うべしと。病危うきに及び、太后請うに後事を以てするに、竟に安定に還らんと云う。語遂りて昏忽たり。太后清河王懌と崔光等に問ひ、去留を議せしむ。懌等皆病亂を以て、先言に従わんことを請う。太后猶お崔光の昔國珍と言うを記し、遂に墓を洛陽に營む。⁽⁵⁾

この記事からすると、安定胡氏は胡國珍の祖・父の代までは本郷に墓がある。伝によれば、國珍の祖の略は後秦に仕え、父の淵は大夏に仕えたのち、世祖時期に降魏し河州刺史に拜されている。國珍は太和一五年（四九一）に爵を嗣いでいるから、父の淵は洛陽遷都以前に死亡し郷里に埋葬されていると考えてよい。しかし一方、「前世諸胡」

で洛陽に葬られた者が多いというのは、洛陽遷都後、この事案がもちあがる國珍の晩年までに、多數の胡氏が郷里を離脱し、洛陽に移住していることを推測させる。その間の事情は必ずしも明らかでないが、靈太后幽閉時の太后の從子の暗躍や、その結果としての「胡氏多く免黜せらる」〔魏書〕卷一三皇后列伝〕という事態からみて、胡氏入宮の頃からその地位に寄生しようとする動きが胡氏一族にあり、國珍をはじめ、彼の前世すなわち父の世代も含めた一族の洛陽移住と勢力増殖のなかで、洛陽での墓地設営が出現したとみてよいのではなからうか。こうした胡氏の場合、國珍自身の墓地についての思案を生み、同時に崔光のような立場の者の強い関心を引いたものと考えられる。

ところで胡國珍は葬地選択に関する別の事例にも登場する。『魏書』卷七〇傳永伝には、

傳永、字脩期、清河の人なり。(中略)永嘗て北邙に登り、平坦の處に於いて稍を奮い馬を躍らし、盤旋瞻望して、終焉の志有り。遠くは杜預を慕い、近くは李冲・王肅を好み、葬は其の墓に附されんことを欲し、遂に左右の地數頃をかう。子叔偉に遺勅して曰く、此れ吾の永宅なりと。永の妻賈氏本郷に留まり、永は代都に至り、妾馮氏を娶り、叔偉及び數女を生む。(中略)馮永に先んじて亡に、永の卒するに及び、叔偉父の命と稱して北邙に葬らんと欲す。賈叔偉の將に馮を以て合葬せんとするを疑い、賈遂に永を封ぜらる所の貝丘縣に歸葬せんことを求む。事は司徒を經、司徒胡國珍本より永と共に征役を經、其の慕う所に感じ、叔偉の焉に葬るを許す。賈乃ち靈太后に邀訴し、靈太后遂に賈の意に従う。事は朝堂を經、國珍理して得る能わず、乃ち東清河に葬る。又永昔宅兆を營み、父母を舊郷に葬る。賈此に於いて強いて之を徙し、永と處を同じうせんとし、

永の宗親抑うる能わず。葬りて已に數十年、棺は桑棗根の遶束する所と爲り、地を去ること尺餘、甚しく周圍と爲り、斧を以て斬斫し、之を坎より出だす。時の人咸く怪しむ⁽⁶⁾。

とある。このようにある人物の埋葬地について、それがまず礼教を司る司徒（胡國珍）にもちこまれていることは、葬地をどこに決定するかということ自体が、礼のあり方として公に審議すべき重要な事項であつたことがわかる。さらにここでは、朝堂に審議が持ち込まれるような事件に發展している。

この二つの史料をもう少しみてみよう。胡國珍の場合は、郷里ではない土地に埋葬を希望し、その理由として「陪葬」を挙げるが、それ以前にすでに洛陽に胡氏一族の墓があるという事実も、重要な要素である。しかし彼は郷里に帰葬されたいとも願つてもおり、國珍に問うた崔光は、後に述べるようにこの時期には郷里の清河に一族墓を維持している。ここには郷里に埋葬される、という意識も強くあることがうかがえる。その意識は、傳永の例ではより強くあらわれる。傳永が郷里以外の土地に埋葬を希望するのは、特定の人物に対する個人的な思慕の念からである。その希望に対して司徒胡國珍が許可する理由は個人的な關係からであり、事がいったん朝堂で審議されると、國珍はその意見を通すことができないのである。以上のように、胡國珍・傳永の記事からは、本籍地に埋葬されるということが北魏においても、重要な行為として認識されていたことがわかる。しかし、そのような認識のなかで、現実の君臣關係を埋葬地に投影した「陪葬」という觀念が外戚や高官のなかにはあり、また都に一族墓を新しく形成している事実がある。

以上のように異民族王朝である北魏においても、墓地の所在やその選択が社会的政治的にも注目されるべき重大

な問題であつたことが確認できた。では實際に、北魏漢人埋葬地がどのような分布を示し、また首都の移転とともにどのような変遷を辿るのか、以下に詳しくみていきたい。

二 平城時代の漢人に対する葬地規制

平城時代では歴代の皇帝は「金陵」に埋葬され⁽⁷⁾、洛陽ではそれぞれの帝陵を中心として元氏宗室墓が形成されていることが墓誌からも証明されている⁽⁸⁾。胡族も平城から洛陽に強制移住され、有名な孝文帝太和一九年六月の「詔すらく遷洛の民、死すれば河南に葬り、北に還るを得ず」⁽⁹⁾（『魏書』卷七下高祖紀）により、一部夫婦合葬の場合に限り例外が認められるものの⁽¹⁰⁾（『魏書』卷二〇廣川王諧伝）、洛陽に墓地がほぼ固定される。これによって新たに設置された居住地とそこに移住させられた人びとの墓地が強制的に合致させられ、「是に於いて代人の南遷せる者、悉く河南洛陽の人と爲る」⁽¹¹⁾（『魏書』卷七下高祖紀）となるのである。事実、胡族の墓葬がこれまでに洛陽で発見され、また大量の墓誌も出土している。ところが、詳しくは後述するが、漢人墓はそれとはこととなる特徴的な分布傾向を洛陽遷都前後でしめすのである。

代（現在の山西省大同市）に都があつた時代、漢人たちは金陵に陪葬されるが⁽¹²⁾（王建、司馬楚之⁽⁹⁾）、ほとんどが代に埋葬されている。しかし彼らの本籍地はここではない。例えば自称太原王氏の王叡も太和三年（四七九）に死亡したのち、代に埋葬される⁽¹³⁾。太和八年（四八四）に死亡した弘農華陰を本籍とする楊阿難⁽¹¹⁾、河内温県の司馬昭⁽¹²⁾、司馬金龍（司馬楚之の子⁽¹³⁾）、勃海脩県の封魔（磨⁽¹⁴⁾）奴も代に埋葬されている。

まず、このような状況の出現の経過を探ってみたい。『魏書』卷三八韓延之伝に、

泰常二年、司馬文思と來たりて入國し、延之を以て虎牢鎮將と爲し、爵は魯陽侯なり。初め延之曾て栢谷場に來往し、魯宗之の墓を省み、終焉の志有り。因りて子孫に謂いて云わく、河洛は三代の都する所、必ずや此に治する者有らん、我れ死して北のかた代に向いて葬るを勞せざるなり、卽し可なれば此に就けと。卒するに及び、子其の言に従い、遂に宗之の墓次に葬る。延之死して後五十餘年にして高祖都を徙し、其の孫卽ち墓の北栢谷場に居る⁽¹⁵⁾

とある。延之の死後五〇余年に洛陽遷都があつたということから、延之の死亡時期は少なくとも四四〇年代前後であつたと考えられる。また『魏書』卷三八王慧龍伝には、太平眞君元年（四四〇）に没した王慧龍について、

眞君元年、使持節・寧南將軍・虎牢鎮都副將に拜せらるるに、未だ鎮に至らずして卒す。没するに臨みて、功曹鄭曄に謂いて曰く、吾れは羈旅の南人（中略）、乞うらくは河内州縣の東郷に葬られんことを。古墓に依りて墳せず、髮齒を藏むるに足るのみと（中略）。時に制す、南人の入國せる者は皆桑乾に葬れと。曄等遺意を申し、詔して之を許す⁽¹⁷⁾

とある。これによれば、當時「南人」の埋葬地は「桑乾」と規定されていたようである。⁽¹⁸⁾この場合の「南人」とは、南朝からの降人あるいは華北漢人全般を指すと思われる。⁽¹⁹⁾桑乾とは、代城の南を流れる瀑水の上流である桑乾水の傍らにあり、前出の勃海封氏の封魔奴も、墓誌によれば埋葬地は「代郡平城縣桑干（乾）水南」であつたという。

もつとも、この規定はかならずしも厳格なものではなく、一種の原則であつたようで、韓延之も王慧龍も代では

ない望みの地に葬られている。韓延之は虎牢鎮將であり、王慧龍も虎牢鎮都副將に任じられる前は黎陽太守在位一〇年で、いずれも劉宋との国境地域が任地であつたから、この二例は「時制云々」の例外であつた可能性もあるが、しかし韓延之などは、わざわざ代に葬られなくとも可であればここに葬れ、と言っているのであるから、これは規制とはいってもそれほどの拘束力はなかつたであろう。

しかしこのような状況は、平斉郡設置の頃に一変したと推測される。というのも、『魏書』卷八六孝感趙琰伝には、天水の人趙琰の両親の葬地について、

皇興中（四六七—四七一）、（中略）時に禁制甚だ厳しく、關を越えて舊兆に葬るを聽さず、琰積もること三十餘年、二親を葬るを得ず⁽²⁰⁾

とあり、墓地についての当時の「禁制」が非常に嚴格であつたことが窺えるのである。⁽²¹⁾

桑乾水の主流には皇興三年（四六九）に平斉郡が設置されている。平斉郡とは、献文帝が三齊を平定した際に清河崔氏を代表とする漢人名族を強制的に徙民させた場所である（『魏書』卷二四崔道固伝）。広義の意味では「南人」といえる平斉民であるが、既に魏軍に降伏帰順したとはいえ、最後まで頑強に抵抗した一団であり、かつその内部にも混乱が絶えない統治困難な集団であり、特に魏にとっては監視をゆるめられない存在であつた。⁽²²⁾ その本拠地から隔絶し、雁門以北の疲弊した土地に強制移住させたのであるから、この禁制は徙民を完結させる方策であつたにちがいない。彼ら平斉民には葬地を選択する自由はなかつたと思われる。清河東武城の人である張讜は延興四年（四七四）に死亡したが、

子敬伯、父の喪を致し、出でて冀州清河の舊墓に葬らんことを求むるも、久しく許されず、柩を停め家に在りて積むこと五六年なり⁽²³⁾

であつたという（『魏書』卷六一張譙伝）。平斉民に編入された東清河の房氏も、房靈賓・靈建兄弟が延興期に平斉で没しているが（『魏書』卷四三房法寿伝）、同じように旧墓には帰葬できなかつたろう。房法寿の族子景伯は「桑乾に生まれ、少くして父を喪い、孝を以て聞こゆ。家貧しく、傭書して自らを給し、母を養うこと甚だ謹なり」とあり⁽²⁴⁾、父に対する埋葬と一連の葬礼は桑乾で行われたものと考えられる（同伝）。しかし彼らは平斉戸として平斉郡に本籍を置かれていたのであるから、形式的にはそこに埋葬するのが礼であるともいえる。しかし、張敬伯が郷土への帰葬を望み、家に柩を留めて墓造つていないことなどから、彼らがそこを本郷として容認しておらず、あくまでも山東をその本源と考えているのがわかる。

このように洛陽遷都前の北魏では、華北統一直後から漢人を代へ葬らせようとする動きがあつたが、平斉郡設置以後は禁制が存在し、漢人は葬地を自ら決定する自由を持たず、代に墓を固定させられていた。洛陽の南遷代人に対して、都近辺に居住地と埋葬地を強制的に一致させた施策の原型が、漢人に対してすでにここに見られるのである。ところが、このような厳格な禁制下に置かれていた漢人の葬地が、その後郷里へと帰葬できる状況に一変する。そのきっかけが洛陽遷都である。

三 洛陽遷都後の漢人埋葬地

1 本籍地埋葬

洛陽遷都後では、漢人の葬地に対して制限が行われた記事は、管見の限り確認できない。前述した傅永の記事によれば、傅永は旧郷（清河）に自分の父母の墓があるにもかかわらず、自分の希望で洛陽に墓地を買い取ることができている。しかし傅永のような例は少なく、ほとんどの漢人は本籍地へ戻る。表1は、本籍地に埋葬され、その姓名と本籍地及び死葬年・死葬地が確認できる漢人官僚を列挙したものである。注目されるのは、彼らのほとんどは洛陽に居住しており、そこで死亡すると本籍地の祖塋まで帰葬されていることである。さらに特筆すべきは、葬地選択ができるようになった漢人らは、代に埋葬されていた先代の墓までも本籍地へ迎えていることである。墓誌によれば、永平四年（五一）には、楊阿難が華陰へ、司馬昭は温県へ、封魔奴は勃海へと、それぞれ代から本籍地へと墓が遷されている。また前述した趙琰、王叡は、

洛陽に遷都し、子應等乃ち郷に還りて焉に葬る（趙琰伝）⁽²⁵⁾

遷洛の後、更めて徙して太原晉陽に葬る（恩倖王叡伝）⁽²⁶⁾

と、それぞれ遷都をきっかけとして旧兆へと遷葬している。このような行為に象徴されるように、代にある墓は彼らにとっては不本意な状態であつて、本来は本籍地へ戻るべきである、という意識が強くあつたことがうかがえる。その意識は北魏王朝側にもあつた。洛陽で暗殺された高道悦は、孝文帝の詔によつて郷里の勃海に遷葬されている

【表 1 洛陽遷都後北魏漢人死葬地…本籍地埋葬】

墓主	本籍地	官職（贈官）	死亡年	死亡地	備考	典拠
趙琰二親	天水		遷都前 遷都後	代 旧兆（天水）	遷葬	魏八六
張謙	清河東武城		延興四（四七四） 遷都後？	代 「旧墓」（清河）	死亡時は旧墓埋葬不許 代から遷葬	魏六一
王叔	太原晉陽	衛大將軍太宰并州牧	太和三（四七九） ？ 遷都後	代 「城東」に埋葬 「太原晉陽」	代から遷葬	魏九三
司馬悅	司州河内溫縣	持節督豫州諸軍事征虜將軍	永平元（五〇八）	「豫州」	頭部以外を豫州から遷葬	文物八一・一二
司馬紹	都鄉孝敬里 河内溫	漁陽縣開國子豫州刺史 寧朔將軍固州鎮將鎮東將軍 漁陽太守宜陽子	永平四（五一） 太和一七（四九三） 永平四（五一） 景明元（五〇〇）	「第」 「温城西北廿里」 「濟州」 「里」	華陰から墓誌出土	考文八四一五 文物八三一八
楊範	弘農華陰潼鄉		永平四（五一）	「平城、仍殯於代」	華陰から墓誌出土	考文八四一五
楊阿難	弘農華陰潼鄉	中散	太和八（四八四） 永平四（五一）	「華陰潼鄉」	華陰から墓誌出土	考文八四一五
楊穎	弘農華陰潼鄉	華州別駕	永平四（五一）	「京師依仁里第」	華陰から墓誌出土	考文八四一五
崔猷	東清河東前	員外郎散騎常侍	永平四（五一） 延昌元（五二二）	「洛陽曜文里宅」 「本邑黃山之陰陰」	代から詔で遷葬 兄の子、高猛にさせる 三座は高猛父高琨、叔父高 偃	魏八三
高彥父兄	勃海脩		延昌三（五一四）	代 「遷葬於鄉」		
高琨	勃海脩	高猛の父、肇の長兄、早卒	延昌三（五一四）	冀州勃海郡條縣崇仁鄉孝義里		疏
高偃		肇の兄、太和一〇年卒	延昌三（五一四）			文物八九一八
高麗夫妻	河間鄭	肇の父母	延昌三（五一四）		祖父父母高麗夫妻？	考古五九一四
邢蟠	河間鄭	車騎將軍	延昌三（五一四）	河北省河間県	邢偉墓の左	考古五九一四
邢偉	河間鄭	博陵太守	延昌三（五一四）	「洛陽永和里」	河北省河間県に墓あり	考古五九一四

皇甫麟	安定朝那	涇雍二州別駕安西平西二府長史？	延昌四（五一五）	〔武垣縣水貴鄉崇仁里、附車騎公神之右坐〕	河北省河間縣に墓あり	彙
楊胤	恒農華陰潼鄉 習仙里	新平安定清水武始四郡太守 平東將軍洛州刺史長寧穆公	延昌四（五一五） 熙平元（五一六）	〔鄧縣中鄉洪澇里〕 〔京師〕 〔華山之陰〕	正始四年に「還鄉」	彙・集
楊播	司州恒農郡華陰 縣潼鄉習仙里 恒農華陰潼鄉 習仙里	使持節鎮西將軍雍州刺史 華陰莊伯 鎮遠將軍華州刺史	延昌二（五一三） 熙平元（五一六） 延昌四（五一五） 熙平二（五一七）	〔洛陽縣之依仁里〕 〔本縣舊坐〕 〔洛陽縣之依仁里第〕 〔本縣之舊坐〕		考文八四一五 彙 文博八五一二 彙・集
楊紆	恒農郡華陰縣 潼鄉習仙里	使持節都督洛州刺史	熙平元（五一六） 熙平二（五一七） 熙平三（五一八）	〔位〕 〔故鄉之弘農華岳之東北十有五里〕 〔金塘宮〕	〔遷神極於故鄉〕	考文八四一五 彙
楊泰	弘農郡華陰縣 同鄉習仙里	朔州刺史華陰伯 散騎常侍營州刺史	熙平二（五一七） 太和二〇（四九六） 太和二〇（四九六）	〔故鄉之弘農華岳之東北十有五里〕 〔金塘宮〕 〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕	〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕	考文八四一五 彙
高道悅	遼東新昌安鄉 北里 〔渤海條異移住〕	散騎常侍營州刺史	太和二〇（四九六） 太和二〇（四九六） 太和二〇（四九六）	〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕 〔崇仁鄉孝義里昔太和之世墳內〕 〔洛陽永年里宅〕	〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕 〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕 〔遷葬於王莽河東岸之平崗〕	考文八四一五 彙
辛祥	隴西狄道 〔晉陽移住〕	征虜安定王長史義陽太守	神龜元（五一九） 神龜二（五二〇） 神龜三（五二〇）	〔河內城〕 〔本鄉溫城西十五都鄉孝義之里〕 〔洛陽里之宅〕	洛陽から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	考集一
司馬昞	司州溫	持節左將軍平州刺史宜陽子	正光元（五二〇） 正光二（五二〇） 正光三（五二〇）	〔本鄉溫城西十五都鄉孝義之里〕 〔洛陽里之宅〕 〔冀州渤海郡條縣南古城之東隅〕	洛陽から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	彙
李璧	渤海條異廣樂鄉 古遷里	大尉府諮議參軍事	神龜二（五一九） 正光元（五二〇） 正光二（五二〇）	〔洛陽里之宅〕 〔冀州渤海郡條縣南古城之東隅〕 〔代京〕	洛陽から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	彙
封魔奴	渤海條異廣樂鄉 古遷里	使持節平東將軍冀州刺史 渤海定公（官官）	太和七（四八三） 太和八（四八四） 正光二（五二〇） 正光三（五二〇）	〔代京〕 〔改葬於本邑〕河北省景縣に墓 〔洛陽之安樂里宅〕 〔洛陽山瀝石澗北〕	代から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	考通五七二三 彙
鄭道忠	榮陽開封	鎮遠將軍統軍將軍	正光三（五二〇） 正光四（五二一） 正光五（五二二）	〔洛陽之安樂里宅〕 〔洛陽山瀝石澗北〕 〔宅〕〔洛陽〕	洛陽から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	彙
崔光	東清河河鄒	太傅領尚書令驍騎大將軍 開府冀州刺史侍中	正光五（五二四） 正光五（五二四） 正光五（五二四）	〔宅〕〔洛陽〕 〔本鄉〕	洛陽から還葬 洛陽から還葬 洛陽から還葬	魏六七

甄凱	中山	處士	正始四（五〇七）	「良之諸兄奉安公夫人之宅兆」	河北省無極県に墓葬	叢
賈思伯	齊郡益都	散騎常侍尚書右僕射使持節	正光六（五二五）	洛陽懷仁里	洛陽から遷葬、泰五四四年合葬	文物五九一一
崔鴻	齊州清河	鎮東大將軍青州刺史	孝昌元（五二五）	「洛陽懷仁里」	山東省寿光縣城關鎮李二村	文物九二一八
王真保	秦州略陽	使持節鎮東將軍督青州諸軍事 度支尚書青州刺史	孝昌元（五二五） 孝昌二（五二六）	「洛陽懷仁里」 「黃山之陰」 山東省臨淄に墓	洛陽から遷葬	考学八四一二
鄭胡	瑯陽開封	持節大都督西道諸軍事驍騎將軍 司徒公天水郡開國公太原王	？	「京師」	洛陽から遷葬	文物七五一六
楊暉	弘農華陰	鎮北將軍銀青光祿大夫平陽太守	大趙神平二（五二九）	甘肅省張家川に墓		
楊侃	弘農華陰	使持節都督雍州諸軍事衛將軍 儀同三司雍州刺史	太昌元（五三二） 建義元（五三八） 太昌元（五三二）	「河陰」 開封城西門西二百步横道北五十步 「華陰之旧塋」	開封市朱仙鎮より出土 河陰の変で死亡？	文物九八一—
楊暉	弘農華陰	車騎大將軍開府儀同三司秦州刺史	普泰元（五三二） 太昌元（五三二）	「遇害于長安」 「習仙里第一」	華陰県五方村楊氏家族墓より出土（以下同じ） 朱爾天光に殺害される	疏
楊暉	弘農華陰	驍騎大將軍司空安定州刺史	普泰元（五三二） 太昌元（五三二）	「遇害于華陰丞相之神塋」 「習仙里第一」		疏
楊暉	弘農華陰	車騎大將軍儀同三司幽州刺史	普泰元（五三二） 太昌元（五三二）	「遇害于洛陽依仁里」 「遇害于太傅之神塋」		疏
楊仲宣	弘農華陰	尚書右僕射青州刺史	普泰元（五三二） 太昌元（五三二）	「遇害于洛陽依仁里」 「遇葬于華陰太尉公之神塋」		疏
楊順	弘農華陰	太尉公録尚書事相州刺史	普泰元（五三二） 太昌元（五三二）	「遇害于洛陽依仁里」 「遇葬于華陰太尉公之神塋」		疏
楊穆	弘農華陰	？（普泰元年？）	？（普泰元年？）	「被害于家」 華陰県から出土		疏

（その後墓地の湿地化により今の山東省徳周県に改葬）。また宣武帝の舅である高肇の父兄に対して、

父兄の封贈せらるること久しと雖も、竟に瘞を改めず。「延昌」三年、乃ち詔して遷葬せしむるに、肇自ら臨赴せずして、唯だ其の兄の子猛を遣わし改服して代に詣らしめ、郷に遷葬せしむるのみ。時人肇の識無き以

て、晒うも責めざるなり（『魏書』卷八三下外戚高肇傳）⁽²⁷⁾

とあり、「自ら本勃海僭人と云う」「肇は出ずるに夷土よりし、時望之を輕んず」とその出身に疑惑がある高肇に対して、宣武帝が代から勃海への遷葬を命じている。⁽²⁸⁾これは封爵による厚遇をうける親族を郷里に帰葬させることによって、高肇を礼的秩序の体現者たらしめ、その出自を粉飾せんとしたものであり、当時の社会的秩序において郷里への帰葬がいかに重要であつたかを示す事例といえよう。代に高肇の父兄の墓があることは、遷都前では禁制に則る状態であつたのだが、遷都後には北魏王朝側の対応が変化しているのである。南遷の代人に対しては洛陽にその墓地が詔によつて強制的に固定されたことは、先に述べた通りであるが、これも一面では新しく本籍地となつた場所に埋葬させるということで、北魏政權上層部に対して、いわば礼制の実現を上から強制したということもできる。以下に具体的にみていこう。本籍地埋葬をすることにより一族墓を形成している氏族（勃海封氏、弘農楊氏、清河崔氏、河内司馬氏）をその手がかりとしたい（表1参照）。

勃海封氏は、遷都前では前述したように、封魔（磨）奴が桑乾水の南に埋葬されたことだけが判明しているが、魔奴は封玄之とその実子四名が処刑された折りに唯一生き残つた玄之の甥であり、宦官となつて北魏に仕え、太和八年（四八四）に死亡した（『魏書』卷三三封懿傳）。代からその墓が勃海に改葬されたのが正光二年（五二一）であるが、周錚氏によれば、魔奴はこの地の第一次入葬者であり、魔奴以降五代にわたる封氏一族がこの地に永眠したことが墓誌から確認できるという。具体的には、第二代は回（魔奴の継子、武泰元年（五二八）死亡）、第三代は隆之（回の長子、武定三年（五四五）死亡）、延之（回の子、興和二年（五四〇）死亡）、第四代が某（隆之の長子、死亡年不明）

と子繪（隆之の次子、死亡年不明）、第五代が德彝（貞觀元年（六二七）死亡）である⁽³⁰⁾。

河内温県司馬氏は、平城時代は楚之が金陵に陪葬され、子の金龍の墓も代にある。しかし遷都後は司馬悦（金龍の長子）が温県に永平四年（五一二）に埋葬される。楚之と金龍の墓が本籍地に移設されないのは、楚之が帝陵陪葬墓であること、金龍墓の壮麗さや「瑯琊王」刻字碑が出土し、おそらく王札をもつて埋葬された可能性が高いことなどから、それらを破棄して移転することは不可能であつたからと推測しておきたい。同年には傍系の司馬昭が代から改葬され、司馬晒夫妻、司馬進宗も同所から墓誌が出土している。

弘農楊氏は漢代から続く名族であり、その本籍地である現在の陝西省華陰県には漢代から楊氏一族墓がすでに形成されている⁽³¹⁾。北魏時代には多数の楊氏一族墓が同地域で発見されているが（華陰県五方村）、いずれも遷都後の墓葬である。楊範・阿難（範の伯父）・穎（範の父・椿の弟）がその最早例であり、範は「濟州」で景明元年（五〇〇）年に死亡、阿難は太和八年（四八四）に平城で死亡したのち代に墓があり、穎は洛陽で永平四年（五一二）に死亡するが、三名は永平四年（五一二）年十一月十七日の同一日に本籍地に埋葬されている。次に胤が熙平元年（五一六）に洛陽で死亡し、同年に華陰に帰葬され（胤の娘は神龜二年に華陰に埋葬⁽³²⁾）、ついで播が延昌二年（五一三）に洛陽で死亡したのち、熙平元年（五一六）に華陰に埋葬される。また同年に舒が、三年後には泰が埋葬される。そして太昌元年（五三二年四月一二月）には長安で爾朱天光に殺害された暉（津の弟）、洛陽の自宅で殺された侃（播の第二子）・昱（椿の子）・遁（津の長子）・順（懿の第四子・穎の弟・津の兄）・仲宣（順の第二子）・穆（徳の長子）等が贈官されて帰葬されるが、彼らは子の場合には父の墓の傍らに埋葬されている。これらの墓誌は楊椿一族が爾朱氏から害を受け、

永熙中（五三二年十二月～五三五年二月）に楊椿一族が華陰に歸葬されたという記述（『魏書』卷五八）を裏付けることができる⁽³³⁾。なお楊椿は伝によれば華陰に還ったのに爾朱天光に普泰元年（五三一）に殺害され、太昌初めに贈官されており、彼らと同じ時に華陰に埋葬されたと考えられる（椿の妻崔氏墓誌は同地域から出土⁽³⁴⁾）。

清河崔氏は、遷都前は平齊戸であるから墓が固定されていたと考えられるが、遷都後は崔光、崔鴻（崔光の甥）夫妻、崔猷の墓が本籍地にある。また東魏以降も同所では崔氏の墓葬が多数発見されている⁽³⁵⁾。

以上の例にみられるように、これら漢人官僚は洛陽遷都後に郷里への遷葬を行い、また代の墓も移設してくる。しかも彼らは多くは遷都後に洛陽に居住し、そこで死亡したのち、郷里に歸葬することが注目される。

2 都への埋葬

ところがその一方で、本籍地ではなく洛陽に埋葬される漢人もいる。表2は洛陽に埋葬された漢人官僚を列举したものである。皇帝の命令によるものは、まずは遷都の年に、文明太后の兄馮熙（本籍長樂信都）、馮誕が孝文帝により代から遷葬されてくる。その後は、孝文帝により、隴西李氏の李冲が「覆舟山、近杜預」の地に埋葬され、ほかにも宣武帝によつて李冲の側に埋葬された琅邪王氏の王肅がある。以上は詔で洛陽に埋葬された例である。そのほかの墓地については皇帝からの直接的な指示は確認できないが、やはり洛陽に居住して同地で死亡した例が多く、そのまま洛陽に埋葬されている⁽³⁶⁾。

以下、前節と同じく一族墓を形成しているとみられる氏族（上谷寇氏、隴西李氏、琅邪王氏）を手がかりに具体的

にみていきたい（以下表2参照）。

上谷寇氏は、洛陽から墓誌が大量に出土しているのは、寇謙之の兄寇讚（字は奉国）の家系である。最早例は寇讚（讚の子）で、正始二年（五〇五）に死亡し翌年に「洛陽城西十五里大墓所」に埋葬される。この場所が上谷寇氏の墓地であるらしく、神龜元年（五一八）に死亡した憑（讚の第七子）・演（讚の兄弟の孫）が同年月日に「洛陽都西廿里北芒上」「洛陽城西北邸附於大兆次」に埋葬される。そして治（讚の第二子）が正光六年（五二五）に死亡し、翌年に「洛陽西大墓次」に埋葬される。また偁（讚の孫）、次に慰（讚の第五子）が「先人墓次」に五二六年に埋葬され、霄（演の子）は永安三年（五三〇）に「洛陽城西廿五里高祖雍州刺史墓次」に埋葬されている。このように墓誌からは讚以後の寇氏一族は洛陽の城西に広大な墓兆を営み、そこに代々一族が集まって埋葬されるのが通例であったことが確認できる。ところで、讚の父であり謙之の兄である讚は『魏書』卷四二寇讚伝によると、太平真君九年（四四八）に死亡しているが、埋葬地に関する記述はない。⁽³⁷⁾しかし、前述の寇霄墓誌にある「高祖雍州刺史」とは南雍州刺史であった讚のことであるから、讚の墓も永安三年以前にはすでに洛陽にあったことがわかる。讚の墓が真君九年の時点から洛陽にあったのかについては直接的に記した史料がないが、伝には、

姚泓滅び、秦雍の人千有餘家、讚を推して主と爲し、歸順す。綏遠將軍・魏郡太守に拜せらる。其の後、秦雍の民の河南・滎陽・河内に來奔せし者、戸萬數に至る。讚安遠將軍・南雍州刺史・軹縣侯に拜せられ、洛陽に治し、雍州の郡縣を立てて以て之を撫す。（中略）讚州に在ること十七年、甚しく公私の譽を獲たり⁽³⁸⁾

とあり、もとより讚がその任地の洛陽と深い関係にあったことが記されている。前述したように、韓延之や王慧龍

【表2】洛陽遷都後漢人死葬地…洛陽埋葬】

墓主	本籍地	官職（贈官）	死亡年 埋葬年	死亡地 埋葬地	備考	典拠
馮熙	長樂信都	假黃鉞侍中都督十州諸軍事 大司馬大尉冀州刺史	太和一九（四九五）	洛陽 〔代〕	代から遷葬	魏八三上
馮誕	長樂信都	假黃鉞使持節大司馬領司徒 侍中都督太師駙馬	太和一九（四九五）	洛陽 〔鍾離〕	代から遷葬	魏八三上
李冲	隴西	司空文穆公		洛陽 〔覆舟山、近杜預〕	高祖命	魏五三
韓顯宗	昌黎棘城	著作郎・五等男	太和二三（四九九） 太和二三（四九九）	〔官〕 〔渾水之西〕		龔・集・北
王肅	琅邪臨沂	侍中司空公	景明二五（五一）	〔沖・預面墳之間〕	平生本意と詔にて	魏六三
張整	并州上黨	中常侍大長秋卿平北將軍 并州刺史雲陽男	景明四（五〇三） 景明四（五〇三）	〔第〕 〔洛陽之西北斗泉陵〕		龔・集・北
李端	隴西□紀		正始二五（五〇五）	〔北芒□案鄉鄰里〕		北
李雍	隴西郡狄道縣 郡鄉和風里	假節驍驍將軍豫州刺史	正始二五（五〇五） 正始二五（五〇五）	〔洛陽之城東里〕 〔覆舟之北原附葬季父司空文穆公神塋之左〕		集・北
寇臻	上谷昌平	幽都二州刺史	正始二五（五〇五） 正始三（五〇六）	〔路接〕 〔洛陽城西十五里大墓所〕		龔・北
王普賢	徐州琅邪		延昌二五（一一三）	〔于洛陽西鄉里〕		百・龔
王紹	徐州琅邪郡臨沂 縣都鄉南仁里	輔國將軍徐州刺史昌國縣開國侯	延昌四（五一五） 延昌五（五一六）	〔第〕 〔洛陽西鄉里〕		龔・集
王昌	太原祁縣高貴鄉 古十里	威遠將軍涼州長史長樂侯	延昌四（五一五） 熙平元（五一六）	〔涼州〕 〔于洛陽北芒之山〕		龔
傅永	清河	安東將軍齊州刺史		〔貝丘縣〕	希望で洛陽に墓地購入	魏七〇
胡国珍	安定臨渾	假黃鉞使持節侍中相國都督 中外諸軍事太師領太尉公司州牧	神龜元（五一八）	洛陽 陪葬帝陵		魏八三下

寇憑	上谷昌平	本郡功曹行高陽縣省兼郡丞	神龜元(五一八)	〔中京〕		兼・集
寇演	上谷昌平	汝南太守	神龜二(五一九) 神龜元(五一八)	〔洛陽郡西廿里北芒山上〕		兼・集
劉滋	定州中山		神龜二(五一九)	〔洛陽城西北芒、附于大兆次〕		兼・集
高猛	勃海脩	使持節侍中都督冀州諸軍事 車騎大將軍司空冀州刺史	正光元(五一〇) 正光四(五二三)	〔京西北五十口張桑川〕 〔子位〕	洛陽東北小李村墓あり 高肇の長兄琨の長子、無後	中文九六一―
郭顯	太原郡晉陽縣	中給事中謁者閔西十州蠹使	正光四(五三三) 正光五(五三四)	〔河南洛陽郡鄉受安里〕 〔北芒山之西崗〕		兼・集・百
李超	秦州靈武郡弘治縣 華風里	懷令	正光五(五三四) 正光六(五三五)	〔洛陽縣之永年里宅〕 〔洛陽縣覆舟山之東南〕		兼・集・百
寇治	上谷昌平	使持節衛將軍荊河四州刺史 七兵尚書	正光六(五二五) 孝昌二(五二六)	〔洛京西大墓次〕 〔家〕	死亡後一四日で埋葬	兼・集・百
寇侶	上谷昌平	督護舞陰太守	孝昌二(五二六) 孝昌三(五二六)	洛陽?		兼・集・百
寇慰	上谷昌平	冠軍府長史	孝昌四(五二八)マ 孝昌四(五二八)マ	〔先人墓次〕		兼
王誦	徐州琅邪臨沂	使持節侍中司空尚書左僕射 驍騎大將軍徐州刺史	建義元(五二八) 建義元(五二八)	〔洛陽〕 〔附葬芒草之隈〕		兼・集・百
王翊	徐州瑯邪郡臨沂 縣都鄉南仁里	散騎常侍鎮南將軍金紫光祿大夫 領國子祭酒洛州刺史	永安元(五二八) 永安二(五二九)	〔位〕 〔於洛陽西鄉里〕		兼・集
寇霄	上谷昌平	先生	? 永安三(五三〇)	〔湯陰〕 〔洛陽城西廿五里高祖雍州刺史墓次〕		兼・集・百

※「」は資料引用。埋葬年は不明の場合は死亡年または該当時期。
 ※略号 魏…『魏書』、考通…『考古通訊』、文參…『文物參考資料』、考文…『考古與文物』、中文…『中原文物』、考學…『考古學報』、考集…『考古學集刊』、墓誌資料は註
 (4)を参照。

も讃と同じく洛陽近辺で活動しており、ほぼ同時期に洛陽周辺への埋葬を許されていることから、讃も代ではなく洛陽に墓を設けた可能性がある。

隴西李氏は隴西狄道を本籍とするが、前述したように李冲は孝文帝の意思により覆舟山の杜預墓近くに埋葬され、その後、李蕤（冲の兄承の子）が正始二年（五〇五）に「覆舟之北原季父司空文穆公神塋之左」に埋葬されている。さらに『魏書』卷八三外戚下李延寔伝には、李冲の長子である李延寔が「州館（青州）」で爾朱兆に殺害されたが、出帝初めに洛陽に帰葬されたことが記される。このほか李冲の血縁者と考えられる李超が正光五年に洛陽で死亡したのち、翌年に「洛陽縣覆舟山之東南」に埋葬されている⁽³⁹⁾。このように隴西李氏は、冲以後は洛陽に墓をつくったことが確認できる。

琅邪王氏は、王肅が太和一七年（四九三）に建康から来奔し、孝文帝に信任されて政治舞台で活躍したが、景明二年（五〇二）寿春で死亡する。宣武帝は「平生の本意、京陵に終わらんことを願う、既に宿心あり、宜しく先志を遂ぐべし。其れ冲・預兩墳の間に葬らしめ、之をして神遊相得しめよ」（『魏書』卷六三王肅伝）と詔し、王肅は李冲と杜預の間に葬られた。その後、王普賢（王肅と前妻謝氏の娘）が「洛陽西郷里」に延昌二年（五一三）に埋葬されると、王紹（王肅と前妻謝氏の子）がその三年後に同じく「洛陽西郷里」に、王誦（王肅の従兄）が河陰の変で死亡し建義元年（五二八）に「芒阜之隅」に、その翌年に王翊（王肅の従兄）が「洛陽西郷里」に埋葬されている。

そのほかすでに述べた胡國珍の例からすれば、神龜元年（五一八）の時点では複数の胡氏の墓葬が洛陽にあった。ここで、洛陽にある上谷寇氏と隴西李氏などの墓が北魏帝陵の陪葬か否か、ということについて少し触れておきたい。隴西李氏や上谷寇氏について、史書や墓誌には「陪葬」を賜った、という記述はなく、墓葬位置も宿白氏の作成した示意图によれば、寇氏墓群は孝文帝の長陵、あるいは宣武帝の景陵とは南北に遠く離れた位置にある。具

体的にみると、例えば寇氏の場合は洛陽遷都後から北魏末まで継続して墓誌が確認できるのだが、その埋葬地が景陵や長陵などといった各帝陵に分散して埋葬されているのではなく、ある特定の地域（洛陽西）に集中している。筆者はしたがって洛陽に墓葬を営む場合、ほとんどは陪葬ではない可能性が大きいと考える。むしろ正式な許可がないとはいえ、帝陵の存在する洛陽に墓葬を構えるということは、陪葬を意識したものと考えることもできる。しかし墓域を一族で代々共有していることから、おそらくそこでは排行による墓葬配置が行われていると思われる、やはり陪葬という性格は薄いのではないかと考える。

四 漢人埋葬地からみた北魏の政治と社会

さて、こうしてみると、京師に出仕している漢人官僚はみな洛陽に居宅を持っている。しかし、例えば楊氏は遷都後は代から阿難の墓を移設し、洛陽やその他の地域で死亡しても華陰に帰葬することによって、北魏末まで途切れることなく一族墓を継続維持しているし、それは司馬氏、崔氏、封氏も同様である。彼らはいずれも遷都前は本籍地への帰葬が禁制によって許されず、それまで形成されていたであろう本籍地の祖先墓と断絶してしまうが、遷都後はそれを修復するかのように代墓から遷葬をし、一族墓を再生させている。そこには、本郷へ帰葬すべしという礼の規範のみでなく、現実的な本拠地としての郷里への執着がある。その意識は、楊氏のように北魏末の動乱に際して、非業の死を遂げた一族を集めて本籍地へ帰葬していることなどからも強くうかがえる。これとは別に、滎陽鄭氏についても、ほぼ同時期に一族一七名が合わせて本籍地に埋葬されたことになっている（鄭胡墓誌）。しか

しこの例については、その経緯や墓誌の形態からみて、通常の帰葬と断定するには慎重でありたい。

一方、上谷寇氏や隴西李氏、安定胡氏などは遷都後には新たに洛陽に墓を形成し、本籍地には帰葬しない。また洛陽以外にある祖先墓も、洛陽に移設してこない。このように本籍地ではない場所で、一族の中でも重要な人物（例えば李冲や王肅）が洛陽に埋葬されることにより、それ以後一族の者は続いて洛陽に墓をつくるのである。そして、帝陵付近に墓葬をおく場合でも、あくまでも一族墓の形態を取ることは注目に値する。

遷都前、特に平斉郡設置以後、禁制によって漢人埋葬地が制限された原因として、この時期までに盛んに行われていた徙民政策が関連しているであろうことは先に述べた。太祖道武帝期に続いて世祖太武帝期は徙民による人口増加の最高潮期で、平城に徙された諸族はおそらく五〇万人内外と考えられ、桑乾河上流地域には漢人以外にも大量の諸民族が徙され、人口密集地域となっていた。⁽⁴⁰⁾ 彼らを移住地に定着させるためには居住地を移すだけでなく、故郷との分断を図り、その地をあらたな桑梓の地とする意識を生じさせるのが有効であると思われる。そこで禁令によって強制的に葬地を設定したものと考えたい。⁽⁴¹⁾

しかし洛陽遷都後、情況が一変したのはこれまで検証したとおりである。漢人は南遷代人のように、葬地を洛陽に固定されなかった。窪添慶文氏の研究によれば、元氏宗室墓において、皇帝ごと、族内の王系ごとのまとまりが宣武帝初めの段階で設定され、それにわずかに先だつて本貫と居住地が定められた、という。⁽⁴²⁾ 漢人の一族墓が形成・再生されはじめるのが時期的にはほぼ同じであることを考えると、洛陽遷都後のこの時期というのは、都では元氏宗族墓の墓域設定が行われるとともに、南遷の代人らの墓や、漢人の一族墓が洛陽に新しく設定され、その一方では

郷里に一族墓を再生しようとする動きが出てくるという、北魏の洛陽遷都後の埋葬地という点で、大きな変動期であつたといえる。当時の社会的・政治的背景をみると、太和二〇年（四九六）に行われた氏族詳定に象徴されるように、胡族社会内部に漢人の社会秩序に対応した、部族的秩序にかわる新しい秩序を構築しようとする動きが顕在化している。元氏をはじめ、漢族の葬地が本籍地に収斂されたり、新たに設定されたりすることは、このような社会情勢のなかで、意識的・自覚的に行われ、また奨励すらされたのかもしれない。

しかし、その変動期において、漢人の一族墓が設定される場所が、本籍地と都に二分されていく現象がみられるのである。それを解釈するために、まずは郷里に一族墓を再生する意識についてみてみよう。趙脩は趙郡房子の人で、宣武帝に取り入り北魏政界に名をはせた悪名高い人物である。

脩の父を葬るや、百僚の王公自り以下弔祭せざるはなく、酒饗祭奠の具、門街を填塞す。京師に於いて爲に碑銘を制り、石獸・石柱は皆民の車牛を發し、本縣に傳致せしむ。財用の費、悉く公家よりす。凶吉の車乗は將んど百兩なり。道路の供給も、亦皆官より出づ。（中略）脩葬日に逮ばざるを恐れ、驛して空期に赴かんとし、左右の從うを求め及び特に遣する者數十人。脩道路に嬉戲し、殆んど威容無く、或いは賓客と婦女を姦掠して裸觀し、從者は噂嗜して喧譁し、詬詈して節無く、畏れて之を惡まざるはなし（『魏書』卷九三恩倖趙脩伝⁴³）。

趙脩が行った葬儀は礼を失するもので、王顕にその罪を弾劾されるにあたつて「趙脩父を葬りし時、路中淫亂不軌」（同伝）たることが理由の一つとして挙げられている。しかし、趙脩のこの帰葬の前提には、そもそも有力漢人らによる都から郷里に帰葬する行為があり、その行為自体が上層氏族たる証であるような認識があつたのではないか。

しかし『魏書』卷三六李順伝には、

趙脩は其の州里を與にす。脩の父母を歸葬するや、牧守以下之を畏れて累跡するも、惟だ（李）憲のみ之が爲に屈せず、時人之を高しとす⁽⁴⁴⁾

とあり、弔問に連なつた牧守以下と異なり、当時太守であつた趙郡李氏の李憲が参列せず、人びともそれを高く評價する。李憲にとつて趙脩は同じ本籍をもつとしても、皇帝と密着した形で権勢を誇る恩倖にすぎず、郷里に遷葬をすること自体、趙脩が権勢を象徴するかのような顯示的な行動にすぎないことを李憲は承知していたであらう。

もとより、そこには上層氏族にとつて郷里に墓を形成することが礼として重要であり、本籍地というものを重要視し、そこそが門閥たる力の根元であるという意識があるからこそ、このような葬地の移動や帰葬が積極的に行われるのではないだろうか。

次に都に一族墓を形成する氏族をみてみよう。隴西李氏は地方豪族であり、李沖が文明太后の寵愛をうけたことによつて、富室となり榮華を誇つた。李沖は自分の一族の扶植にもつぱら努め、帝室と婚姻關係を結び、一族は残らず官職を授けられている（同伝）。上谷寇氏も、漢代から続く名族と自称するが、實際は道士寇謙之が太武帝に信任されたことによつて政權上に地位を築きあげた氏族といえる。安定胡氏も靈太后が政權を握ることにより、外戚としてその勢力を持ち得た豪族であらう。琅邪王氏は南朝では超一流の貴族として認知されているが、北魏では王肅が來奔して帝の信任をえたことから始まり、北魏においては門閥という力よりも皇帝との直接的な關係によつて政界に出てきた氏族と思われる。宣武帝以後、北魏王朝では寒人・外戚・恩倖などの勢力によつて政治が左右さ

れるようになるが、このように、洛陽に墓地を選択する氏族には、皇帝との密接な関係をもち、その関係を後ろ盾として初めて政治舞台に登場したという性格が共通している。

では郷里との関係はどうか。趙脩と同じく当時權勢を誇った高肇が父兄を郷里の勃海に遷葬させられたことは先にも引いたが、高肇は礼を體現すべき重大な行いである本籍地帰葬というものを、まったくいつてよいほど重要視していない。李冲は生前では「謙以て自らを牧い、積みて能く散じ、近きは姻族よりし、郷閭に逮ぶに、分及せざるはなし」(同伝)と郷里を重視している。しかし隴西李氏の本籍は狄道にあるも、永嘉の乱後彼らは河西地方に一世紀近く居住し、武威・酒泉・敦煌・伊吾などの地を西北諸政權の興亡に伴い屢々遷居しつづけ、入魏以後は洛陽遷都までは平城に居住していた⁽⁴⁵⁾。また上谷寇氏は、もとは秦雍(陝西)を本拠地とする大族であり、安定胡氏も前述のようにもとは河西地方の政權に依拠していた⁽⁴⁷⁾。とすると、彼らは北魏時期にはもとよりその標榜する本籍地とは繋がりが薄く、同じく洛陽に居住しながらも弘農楊氏や山東氏族等が維持する郷里との関係とは隔たりがある。こうした立場が葬地の選択にも具体的に表れているのではないだろうか。同じく都に居住しながら、一方は本籍地に帰葬し洛陽はいわば仮住まいの地であるのに対し、一方は都において一族墓を造り、永住の形態をとっている。これは、やはりその政治的立場あるいは自らの存立する基盤というものに対する意識が異なっていたと考えられる⁽⁴⁹⁾。つまり、都に居住しながらも本籍地に帰葬して祖塋を再生維持する漢人氏族は、門閥的な立場を示しているであり、彼らがいかに郷里というものをその存在の根元として重要視しているかが頭かである。その一方で、都に陪葬されたり一族墓を形成する漢人氏族は、郷里から離れて都に永住して官僚的存在と化した傾向をより強く表

している。このように、北魏後期の漢人官僚が、自らの存立基盤に関する意識に立脚しながら二つの集団へと分化し始め、なおともに併存しているところに、北魏漢人官僚社会の特質をみる事ができる。

おわりに

本稿では、葬地の所在とその変遷を、洛陽遷都前後で対比させながら明らかにし、その社会的背景をふくめて考察を試みた。簡単にまとめると、以下の点が確認できる。

まず洛陽遷都前、とくに平斉郡設置以後における代都周辺への葬地集中が確認できたが、これは北魏王朝の徙民政策と関連した葬地に対する禁制によつて、いわば強制的に設定されたものであった。そして洛陽遷都後は、元氏自らも本籍地埋葬を実践するとともに、胡族へも強制的に定着させていく。漢人については、もとよりそれが礼の実践として必須と認識している上層氏族が、次々と本籍地へと代から墓を移設して、一族墓を再生していくが、ここには彼らがその存立基盤とする郷里との関係性もうかがえる。現実問題として、彼らが都に住みながらも郷里に影響を及ぼし、またそれを持続し続けるためには、帰葬して一族墓を存続させることが一つの有効な手だてであったと考えられる。しかし一方で本籍地ではなく都に墓を選択する氏族も出現する。彼らの共通した性格には皇帝との密接な関係が認められるだけでなく、本籍地（郷里）における礼を介した関係についての意識に希薄さが見受けられる場合もある。都に住みそこに葬られることによつて、彼らは北魏政権に組み込まれて基盤を他に持たない存在となつてゐる。

以上のように、埋葬地選択という視点から北魏漢人官僚社会をみると、特に洛陽遷都後において、このような二つの立場をとる集団がより明確に分化しはじめ併存していることが読み取れる。しかもその両者の標榜する本籍地や本拠地が、一方は隴西・安定のような西方にあり、一方は勃海・河内・弘農・清河にあるというような状況は、のちの隋唐初における山東貴族と関隴集団の問題に關連する可能性があると思われ、かつ唐代の官僚社会体制にも連なる問題でもあると考えられる。唐代においては、居住地の中央集中化に伴い、上層氏族が墓を兩京付近に構えて本籍地を移貫する現象から、王朝権力への従属度を強めていくことがすでに指摘されてもいる。⁽⁵⁰⁾これについては、唐代へと連なる北朝全体の埋葬地の変遷などを手がかりにして深く考察する必要がある。今後の課題としたい。

註

- (1) 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』同朋舎、一九八六年。
 - (2) 川本芳昭「北魏における身分制について」注一八
〔魏晉南北朝の民族問題〕汲古書院、一九九八年所収。
 - (3) 宿白「盛樂・平城一帯的拓跋鮮卑——北魏遺跡」〔文物〕一九七七年第一期、「北魏洛陽城和北邙陵墓——鮮卑遺跡輯録之三」〔文物〕一九七八年第七期。
 - (4) 本稿で使用した考古資料は、墓誌については余扶危・張劍主編『洛陽出土墓志卒葬地資料匯編』北京圖書館出版社、二〇〇二年【洛卒】、趙超編『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社、一九九二年【彙】、趙万里編『漢魏南北朝墓誌集釈』科学出版社、一九五六年【集】、北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』（三國兩晉南北朝）中州古籍出版社、一九八九年【北】、許宝駒・王壯弘編『北魏墓誌百種』上海書畫出版社、一九八七年【百】、中國文物研究所他編『新中國出土墓誌』（河南壹上下）文物出版社、一九九四年、同『新中國出土墓誌』（陝西壹上下）文物出版社、二〇〇〇年、羅新・葉煒『新出魏晉南北朝墓志疏証』中華書局、二〇〇五年【疏】
- 〔一〕内は表中の略号。なお、遷都前の洛陽出土墓誌に

つては偽刻の可能性が高いため除外した（王昕「河南新見陶潛墓志辨偽」『中国歴史文物』二〇〇三年第六期）。墓葬については拙稿「中国墓葬文献目録（北朝篇）」（『大阪市立大学東洋史論叢』一二号、二〇〇二年）と最近刊の発掘報告書を参照した。

- (5) 始國珍欲就祖父西葬舊鄉、後緣前世諸胡多在洛葬、有終洛之心、崔光嘗對太后前問國珍、公萬年後爲在此安厝、爲歸長安、國珍言當陪葬天子山陵、及病危、太后請以後事、竟言還安定、語遂昏忽、太后問請河王懌與崔光等、議去留、懌等皆以病亂、請從先言、太后猶記崔光昔與國珍言、遂營墓於洛陽、

- (6) 傅永、字脩期、清河人也、（中略）永嘗登北邙、於平坦處奮稍躍馬、盤旋瞻望、有終焉之志、遠慕杜預、近好李冲・王肅、欲葬附其墓、遂買左右地數頃、遺勅子叔偉曰、此吾之永宅也、永妻賈氏留於本鄉、永至代都、娶姜馮氏、生叔偉及數女、（中略）馮先永亡、及永之卒、叔偉稱父命欲葬北邙、賈疑叔偉將以馮合葬、賈遂求歸葬永於所封貝丘縣、事經司徒、司徒胡國珍本與永同經征伐、感其所慕、許叔偉葬焉、賈乃邀訴靈太后、靈太后遂從賈意、事經朝堂、國珍理不能得、乃葬於東清河、又永昔營宅兆、葬父母於舊鄉、賈於此強徙之、與永同處、永宗親不能抑、葬已數十年

矣、棺爲桑棗根所遠束、去地尺餘、甚爲周固、以斧斬斫、出之於坎、時人咸怪、

- (7) 金陵的位置については未だ確定されていないが、北魏帝陵の「金陵」（盛樂金陵）「雲中金陵」は、平魯・左雲・山陰を結ぶ地帯にあった可能性が高いという（李俊清「北魏金陵地理位置的初步考察」『文物季刊』一九九〇年第一期）。

- (8) 宿白氏前掲論文。なお宿白氏の研究をうけ北魏宗室の葬地形成を論じた研究に、窪添慶文「本貫、居住地、葬地から見た北魏宗室」（『魏晉南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三年所収）がある。

- (9) 『魏書』卷三〇王建伝、卷三七司馬楚之伝。

- (10) 追策叡母賈氏爲妃、立碑於墓左、父子並葬城東、相去里餘（『魏書』卷九三恩倖王叔伝）。

- (11) 杜葆仁・夏振英「華陰潼關出土的北魏楊氏墓志考証」（『考古与文物』一九八四年第五期）。

- (12) 『文物』一九八三年第八期。

- (13) 「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」（『文物』一九七二年第三期）。

- (14) 『考古通訊』一九五七年第三期。

- (15) 泰常二年、與司馬文思來入國、以延之爲虎牢鎮將、爵

魯陽侯、初延之曾來往栢谷塢、省魯宗之墓、有終焉之志、因謂子孫云、河洛三代所都、必有治於此者、我死不勞向北代葬也、即可就此、及卒、子從其言、遂葬於宗之墓次、延之死後五十餘年而高祖徙都、其孫即居於墓北栢谷塢、

(16) 『北史』卷二七韓延之伝にも、「延之後五十餘年而孝文徙都」とあり。

(17) 眞君元年、拜使持節・寧南將軍・虎牢鎮都副將、未至鎮而卒、臨沒、謂功曹鄭曄曰、吾羈旅南人（中略）、身歿後、乞葬河內州縣之東鄉、依古墓而不墳、足藏髮齒而已、（中略）時制、南人入國者皆葬桑乾、曄等申遺意、詔許之、

(18) 王慧龍のこの遺意は詔によって許され、その後史人及び將士がその墓に仏寺を建て、呂玄伯はこの墓を終生守ったことなどが記されている（同伝）。

(19) 『魏書』をはじめ史書にある「新人」「旧人」「北人」「南人」という用語は、境界があいまいで、多義的な意味合いをもつ。そのうち「南人」については、南朝人、慕容燕治下の人びと、華北漢人・南朝からの降人をさす場合が確認されている（川本氏前掲論文）。

(20) 皇興中、（中略）時禁制甚嚴、不聽越關葬於舊兆、琰積三十餘年、不得葬二親、

(21) ここでいう「関」とは、代城南にあった雁門関のこと

であろう。雁門関は平城の位置する桑乾河上流盆地に南からはい重要な関門にあたり、平城時代には太原・雁門関・雲中・五原と通じる重要な南北縦断幹線交通路はこの雁門関において平城に接していた（前田正名『平城の歴史地理学的研究』風間書房、一九七九年）。なお、この禁制の実地時期について川本氏は前掲論文同注において「孝文帝初期のこととして」と解釈されているが、その根拠については述べられていない。

(22) 塚本善隆「北魏の僧祇戸・仏図戸」（『塚本善隆著作集 第二卷 北朝仏教史研究』大東出版社、一九七六年所収）。

(23) 子敬伯、求致父喪、出葬冀州清河舊墓、久不被許、停柩在家積五十六年、

(24) 生於桑乾、少喪父、以孝聞、家貧、傭書自給、養母甚謹、

(25) 遷都洛陽、子應等乃還鄉葬焉、

(26) 遷洛後、更徙葬太原晉陽、

(27) 父兄封贈雖久、竟不改瘞、（延昌）三年、乃詔令遷葬、肇不自臨赴、唯遣其兄子猛改服詣代、遷葬於鄉、時人以肇無識、哂而不責也、

(28) 『魏書』の高肇伝によれば、肇の五世祖の願が晋の永嘉中に乱を避けて勃海から高麗に移り、肇の父颺が孝文帝

のはじめに弟の乗信や郷人らと北魏に帰順して厚遇をうけ、肇の娘が孝文帝の后となり宣武帝を生んだ。宣武帝が即位し、高肇一族は次々と高官に拝されるようになる。このとき代から帰葬されたのは、高肇の父颺とその妻袁氏（合葬）、兄の琨（早卒、猛の父）・偃（太和一〇年死亡）で、山東省徳周県にある高琨墓を含めた三座がその墓にあたると思われる（羅・葉氏前掲書）。高肇自身はこの帰葬の翌年に非業の死を遂げており、勃海に帰葬されたかどうか不明であるが、代役として帰葬を行った甥の高猛は正光四年（五三二）に洛陽の「茫山之陽」（洛陽東北小李村に墓あり）に埋葬され、勃海に帰葬されてはいない。彼には後継がおらず、また宣武帝の妹の長樂公主元瑛と婚姻し、孝昌二年（五二六）に長樂公主が高猛の墓に合葬されていることから、元氏の血族として洛陽に埋葬されたとも考えられる。

(29) 一族墓と家族墓は、家系中心の独立墓地や宗法觀念の規制の有無、私人の権力あるいは財産關係をもつて墓を選定したか、という点において区別すべきであるが（韓国河「論秦漢晋時代の家族墓地制度」『考古与文物』一九九九年第二期）、本稿の資料とする墓誌や発掘墓、文献史料からは各墓の正確な墓葬地点が確認できないため、ここでは同じ氏族が同じ地点に集合して埋葬される事象に対して、一

括して一族墓という用語を使用する。

(30) 周鋒「河北景県封氏墓群叢考」〔『文物春秋』一九九二年第二期〕。

(31) 「潼関吊橋漢代楊氏墓群発掘簡記」〔『文物』一九六一年第一期〕。なお弘農楊氏は後漢から五胡にいたるあいだに数代のブランクがあり、北魏の楊氏も無条件には名族とはいえない要素を孕むという（竹田龍児「門閥としての弘農楊氏についての一考察」『史学』三二号（一一四）一九五八年）。

(32) 杜葆仁・夏振英前掲論文。

(33) 「北齊書」卷三四楊愔伝には、このとき追贈官された一族を楊愔（播の弟）が還葬する様が記されている。

(34) 羅・璋氏前掲書。

(35) 「臨淄北朝崔氏墓」〔『考古学報』一九八四年第二期〕。

(36) そのほかに本籍地でも都でもない埋葬地を選択している、魏郡阿陽の邵真（『文物参考資料』一九五五年第二期、西安に墓葬あり）などのような例も若干みられるが、大勢は本籍地と都の二つに分けられる。

(37) 寇讚伝によれば、讚の父脩之の墓は本貫上谷から徙った馮翊にあつた可能性がある。世祖は讚の弟謙之を重用するにあたり、脩之を追贈し、秦雍二州に詔してその墓に碑

を立てさせている。

- (38) 姚弘滅、秦雍人千有餘家、推讚爲主、歸順、拜綏遠將軍・魏郡太守、其後、秦雍之民來奔河南・滎陽・河内者戶至萬數、拜讚安遠將軍・南雍州刺史・軹縣侯、治于洛陽、立雍州之郡縣以撫之、(中略) 讚在州十七年、甚獲公私之譽、

- (39) 李超の墓誌には李冲との血縁關係は記されず、また史書には李超に関する記述がない。李冲の属する隴西李氏の系図を再現してみると、排行が採用されるのは冲の次世代からであり、その方法は兄弟において同字が設定されている。とすると、超の字は景昇(本字は景宗)であり、李超は李琰之(字は景珍、『魏書』卷八二李琰之伝)の族弟と考えられ、冲の血縁關係にある可能性が高い。

- (40) 前田氏前掲書。

- (41) 特に漢人に対する諸制限(葬地、居住、婚姻など)は、北魏政權が彼らが必要としていた結果でもあるという川本氏の指摘も重要である(川本氏前掲論文)。

- (42) 窪添氏前掲論文。

- (43) 脩之葬父也、百僚自王公以下無不弔祭、酒饗祭奠之具、塋塞門街、於京師爲制碑銘、石獸・石柱皆發民車牛、傳致本縣、財用之費、悉自公家、凶吉車乘將百兩、道路供給、

- 亦皆出官、(中略) 脩恐不逮葬日、驛赴空期、左右求從及特遣者數十人、脩道路嬉戲、殆無戚容、或與賓客姦掠婦女裸觀、從者噂嚕喧譁、詬詈無節、莫不畏而惡之、
- (44) 趙脩與其州里、脩歸葬父母也、牧守以下畏之累跡、惟(李) 憲不爲之屈、時人高之、

- (45) 張金龍「隴西李氏初論——北朝時期的隴西李氏」(一九九四年初出、『北魏政治与制度論稿』甘肅教育出版社、二〇〇三年再録)。

- (46) 陳寅恪「崔浩与寇謙之」(一九五〇年初出、『陳寅恪文集之二 金明館叢稿初編』上海古籍出版社、一九八〇年再録)。

- (47) 晋代においては、胡廣、胡烈なども涼州に赴任している(『晋書』卷五七胡奮伝)。

- (48) 陳爽氏はこのような都と郷里に住む形態を「双家制」と呼び、門閥がその根基とする郷里との密接な關係を保持するための重要な方法であったとする(『世家大族与北朝政治』中国社会科学出版社、一九九八年)。

- (49) このような二つの立場をとる北魏の漢人士族の存在については、かつて谷川氏が指摘された「賢才主義」と「門閥主義」という概念と関わる可能性があると思われるが、これについては北魏分裂後から隋の埋葬地についての考察

を踏まえた上で深く考えていきたい（谷川道雄「北魏官界における門閥主義と賢才主義」『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九九八年所収）。

- (50) 毛漢光「從士族籍貫遷移看唐代士族之中央化」（一九八一年初出、『中国中古社会史論』上海書店出版社、二〇〇二年再録）、愛宕元「唐代范陽盧氏研究——婚姻關係を

中心に——」（川勝義雄・礪波護編『中国貴族制社会の研究』京都大学人文科学研究所、一九八七年所収）、愛宕元「唐代范陽鄭氏研究——本貫地帰葬を中心に——」（『人文』XXXV、一九八八年）、韓昇「南北朝隋唐士族向城市的遷徙与社会変遷」（『歴史研究』二〇〇三年第四期）。